

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12978

研究課題名（和文）18世紀フランスにおける自伝文学の成立過程の研究

研究課題名（英文）The development of autobiography in 18th century France

研究代表者

石田 雄樹 (Ishida, Yuki)

神戸大学・国際文化学研究所・講師

研究者番号：70837153

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：自伝という文学ジャンルはフランスにおいては18世紀にルソーの『告白』（1782-1788）によって成立したと考えられてきた。しかし、ルソー以前にも多数の自伝文学が存在するがその全容は未だ明らかではない。本研究では自伝の生成過程をより具体的に把握するため、ルソー以外の自伝文学、特にレチフ・ド・ラ・ブルトンヌに注目した。というのも、レチフは終生自伝的要素にこだわって創作活動を行ったからである。分析の結果、レチフはフランス革命などの社会的混乱に抵抗し、内的な幸福を得るために自伝を執筆したことが明らかとなった。自己探究と内的幸福という倫理が自伝の発展に影響しているのではないかと仮説を得るに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

18世紀以前は正統な文学として評価されていなかった自伝文学は、イギリス経験論の隆盛によって「自己を語る」ことが人間学に貢献するという哲学的な論拠を得て、新たな文学ジャンルとして確立したというのが従来の定説であった。しかし、本研究はフランス革命に代表される社会不安の増大が内的幸福や自己意識の探究といった文学潮流を促し、そのような要因こそが自伝の発展においてはより決定的だったのではないかと仮説を提示するに至った。18世紀思想において重要な「不安」や「倫理」といったテーマと「自己語り」の新たな関連性を示すことができたことが大きな成果である。

研究成果の概要（英文）：The literary genre of autobiography is thought to have been established in France in the 18th century with Rousseau's Confessions (1782-1788). However, although there were many autobiographical works before Rousseau, the full scope of them is still unclear. In this study, to more concretely understand the process of autobiography creation, we focused on autobiographical literature other than Rousseau, especially Retif de la Bretonne. This is because Retif remained committed to autobiographical elements throughout his creative activities. Analysis revealed that Retif wrote his autobiography to resist social upheavals such as the French Revolution and to find inner happiness. We hypothesize that the ethics of self-exploration and inner well-being influence the development of autobiography.

研究分野：人文学

キーワード：自伝 フランス文学 18世紀 自己語り レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ

### 1. 研究開始当初の背景

18 世紀フランスにおいて自伝という文学ジャンルは、イギリス経験論を根拠として、ジャン＝ジャック・ルソーの『告白』(1782-1788)によって成立したとされるのが、従来の文学史の定説であった。もちろん自伝以前にも「自己を語る」文学としては例えば回想録というジャンルが存在したが、しかしこれは公的な証言としての性格が強く、個人が自らの人生を物語る正当性は西欧文学においては長らく認められなかったのである。だが、ジョン・ロックに端を発するイギリス経験論は、「人間が知性を得るのは経験によってのみである」という思想を展開し、これによって「自己を語る」こと、つまり自らの経験・人生を物語る自伝文学が、経験論が目指した「人間の研究」すなわち人間学に貢献することが可能であるという哲学的な論拠が生まれた。

ルソーは深く経験論に親しんでいたこともあり、このような自伝の生成過程に関する見解は説得力があるものと見做せる。しかし、ルソー以前にも例えばジャック＝ルイ・メネトラ『わが人生の記』(1764-1803 頃執筆)のような多数の自伝的文学が存在する事実は、これまでの研究ではあまり注目されてこなかった。ルソー以前の自伝的文学の存在は、この時代における自伝の発展がイギリス経験論のみによって促されたわけではないことの証左である。そこで本研究では経験論以外の新たな視座から 18 世紀フランスにおける自伝の生成過程を考察することが可能ではないかと考えるに至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、18 世紀フランスにおいて自伝文学がどのような過程を経て文学ジャンルとして成立するに至ったかを明らかにすることである。しかし、この時代に書かれたすべての自伝作品を検討することは不可能であるため、分析対象は主にレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ(1734-1806)の作品とした。レチフは大衆作家であり、農村の出自ということもあって、当時の知識人階層からは過小評価された。19 世紀以降もアカデミアからは軽視される傾向が続いたが、20 世紀に入ってレチフが一貫して自伝的要素にこだわって文学創作をし、「自己同一性」や「自己意識」の問題を文学の領域で探究した、後のバルザックやプルーストの先駆者としての側面を持つ、きわめて近代的な作家であると再評価され、現在はレチフ学会が創設されるなど、国際的に活発なレチフ研究がなされている。日本においては未だマイナーではあるが、18 世紀フランスにおいてレチフほど自伝文学を実践した作家がいないことは確かであり、レチフを中心に 18 世紀の自伝の発展過程を検討することによって、自伝というジャンルの特性を見直すことが可能であると判断した。

### 3. 研究の方法

レチフ作品を中心に、適宜ルソーやメネトラといった同時代の自伝作品を比較対象として参照しながら、自伝がどのように生成され、また作家たちは自伝というジャンルにおいて何を表現しようとしたのかを明らかにすることを目指した。

具体的な分析方法は以下の二点である。

第一に、物語論・言語学的分析である。自伝は「私」という一人称で物語られ、常に語りの視点が「私」という単一のものに固定されていると思われる傾向があるが、しかし実際にはレオ・シュピッツァーが明らかにしたように、自伝の語りには「過去の私」と「(自伝を執筆している)現在の私」という二項対立を観察することが可能である(Leo Spitzer, *Stilstudien*, München, Max Hueber, 1928)。シュピッツァーは「過去の私」を「語られる私」、「現在の私」を「語る私」と定義した。このようないわば「私」の多層性こそが文体面における自伝文学の最大の特徴であり、それがどのような文学的効果を及ぼしているか把握することを試みた。

第二に、テーマ的分析である。近年、ステファヌ・ピュジョルなどの研究によって(Stéphane Pujol, *Morale et sciences des mœurs dans l'Encyclopédie*, Paris, Honoré Champion, 2021)、18 世紀フランスにおいて「不安」というテーマが各種芸術や思想において重要な役割を担っていたことが指摘されている。最終的にフランス革命に行き着く社会秩序への疑問や既存の価値体系への問題提起の背後に動因として存在した「不安」こそが、18 世紀に流行した社会改革論や道徳論を生み出す直接的な要因であったと考えられるのである。そこで本研究では「不安」という観点からレチフの自伝『ムッシュー・ニコラ』(1794-1797)やルポルタージュ文学『パリの夜』(1788-1794)の読み直しを試み、レチフが「不安」をどのように文学創作に活用しているかを把握することを目指した。

### 4. 研究成果

まず、物語論・言語学的分析について述べる。

分析の枠組みとして、上述のシュピッツァーの「語る私」「語られる私」に加えて、エミール・バンヴェニストやハラルト・ヴァインリッヒといった「語り」研究の成果を取り加えて(Émile Benveniste, *Problème de linguistique Générale*, vol. 1. Paris, Gallimard, 1966 (エミール・バンヴェニスト、岸本通夫他訳、『一般言語学の諸問題』、みすず書房、1983); Harald Weinrich, *Le Temps*, traduit

par Michèle Lacoste, Paris, Seuil, 1973 (ハラルト・ヴァインリヒ、脇阪豊他訳、『時制論』、紀伊国屋書店、1982))、「語り ABC 仮説」を構築するに至った。その概要は以下の表のとおりである。

表：語り ABC 仮説

	事項	指標
語り A	作品世界内の主人公の言動を物語る語り (「語られる私」に該当)	単純過去・半過去・大過去・前過去
語り B	自伝を執筆している作者の視点からなされる語り(「語る私」に該当)	現在・複合過去・半過去 読者への呼びかけ・時間ダイクシス・ 空間ダイクシス
語り C	語り AB に分類不可能の語り	主語人称代名詞「私」の消失

上記の仮説はシュピッツァーの「語る私」「語られる私」には存在しなかった種類の語り(語り C)があり得ることを指摘した点にその最大の特徴がある。語り C とは端的にいえば、自伝であるのに自伝的ではない語り、つまり三人称小説のような客観的な語りのことである。以下に語り C の概要について記す。

そもそも、日本語と英語やフランス語のような欧米語の差異の一つに、主観的な語りか客観的な語りかという傾向性の違いがあることが、これまで多くの研究者によって指摘されてきた。古典的な研究としては池上嘉彦の「日本語は「主観的把握」の傾向が強く、欧米語は「客観的把握」の傾向が強い」という主張が有名である(池上嘉彦、「日本語と主観性・主体性」、『ひつじ意味論講座。主観性と主体性』、澤田治美編、ひつじ書房、2011年)。

このような観点からすると、客観的傾向の強いフランス語は、たとえ主観的な語りを試みたとしても、無意識の内に客観的な語りに移行してしまう現象が考えられるのではないだろうか。レチフの場合でいえば、自伝文学はあくまで「私」という主観的な視点から物語られなければならない制約があるが、しかしフランス語が本来持つ客観的把握の傾向のために、主観的な一人称の語りから客観的な三人称の語りへ移行してしまう現象が推測可能である。それこそが語り C であり、レチフの自伝『ムッシュ・ニコラ』では、自伝であるはずなのに自伝の絶対的な語り手「私」が消失し、全知の視点から三人称で物語られる場面が時折挿入されるという事態が観察できるのである。このような語り C が示す主観性と客観性の対称性は、レチフ作品のみならず、欧米語の文学作品と日本語の作品の大きな性格の違いではないかという仮説を本研究では提示するに至った。

また、初期作品から晩年におけるレチフ作品を「私」の多層性」という観点から検討した結果、初期作品においては自伝的要素があまり用いられず、後年になるに従って、自伝的要素とそれがもたらす語りの多層性がより活用される傾向にあることが判明した。これは自らの体験をもとにした自伝的小説『墮落農民』(1775)の商業的成功により、レチフが自伝的要素を文学創作に活用するメリットを自覚したためであると考えられる。しかし、その結果、レチフは自伝と虚構を意図的に混同させる文学作品を執筆していくことになり、自伝作品に本来であれば求められるべき事実への真正性を蔑ろにする傾向があることがわかった。だが、この点は逆説的にいえば、レチフが自伝に求めたことは真実をありのままに記すことではないという事実を意味し、レチフはイギリス経験論が主張した「自伝の人間学的な有用性」をさほど重要視していないのではないかという仮説が得られた。

次にテーマ的分析の結果について述べる。

『パリの夜』を主な分析対象とし、「不安」という観点からレチフ作品の検討を中心に行った。『パリの夜』は、パリの民衆の様々なエピソードを描いた第一部「パリの夜」、フランス革命前後のパリの混乱を描いた第二部「夜の週日」および第三部「パリの二十夜」から構成される。第一部はフィクションの色彩が濃い、第二部以降は写実的な要素が強まり、より自伝的になると指摘できる。本作で説かれる道德哲学も第一部では「友愛」や「勤労」といった美德が重要視され、既存の社会体制を安定させることが第一の目的とされているが、社会的混乱の高まる第二部以降ではそのような道德そのものが疑問視される事態となり、レチフは社会変革の意志を失い、自伝的要素の強いエピソードを描くことに注力し、内的な幸福を探究するように変化するのである。このことから、レチフにおいては自伝的要素は社会がもたらす不安に抵抗する手段であったのであり、自身の人生を自伝という形で再現することで過去に幸福を探し求めるレチフの姿を見出すことができることを本研究では指摘するに至った。自伝が内省的な幸福を実現する手段であり、そのような自伝の役割はこれまでの研究では言及されることが少なかった要素であると思われる。

また、短編小説集「ジュヴェナル」についても「幸福」や「不安」という観点から分析を行った。「ジュヴェナル」は当初は一冊の本として計画されたものであるが、執筆途中で放棄され、

「ジュヴェナル」用に使われた各エピソードは『同時代女』や『パリの夜』など他のレチフ作品に挿入されている。そのため、「ジュヴェナル」の分析は困難を要する。本研究では『パリの夜』の補遺として「ジュヴェナル」が果たした役割を主に「幸福」の観点から考察した。その結果、「ジュヴェナル」においても他のレチフ作品同様、幸福の探究は重要な目標の一つとして位置付けられていること、特に文学と読書が公的実現するために必要な社会改善に有効であるという主張がなされていることが判明した。この観点からすると、「ジュヴェナル」は、道徳と社会改革を目的の一つとして掲げた『パリの夜』と比較分析が可能な作品であるといえるだろう。ただ、実際にレチフが理想とした社会がいかなるものであるかは「ジュヴェナル」中では具体的に示されておらず、その点でレチフの改革論には不備があることが併せて明らかとなった。

今後の課題としては、他の作家においても自伝的要素がレチフと類似の働きを担っているかどうか検討し、自伝が文学史において果たした役割をより正確に把握すること、またレチフの幸福観念における理想的社会がどのようなものであるか明らかにすることである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yuki ISHIDA	4. 巻 55
2. 論文標題 L'inquietude, la morale et le bonheur dans Les Nuits de Paris	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Etudes retiviennes	6. 最初と最後の頁 129-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuki ISHIDA	4. 巻 15
2. 論文標題 La vertu chez Sade et chez Retif a l'epreuve de la traduction japonaise	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Malice	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yuki ISHIDA	4. 巻 54
2. 論文標題 La philosophie morale et la strategie litteraire dans Les Nuits de Paris	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Etudes retiviennes	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田 雄樹	4. 巻 57
2. 論文標題 レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『パリの夜』における道徳哲学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 33-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013079	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yuki ISHIDA	4. 巻 52
2. 論文標題 La quete du bonheur et la lecture ideale dans les juvenales et Les Nuits de Paris	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Etudes retiviennes	6. 最初と最後の頁 163-171
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 石田 雄樹
2. 発表標題 ミシュレとレチフにおける語りの多層性
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2022年度北海道・東北支部大会シンポジウム「ミシュレと語り」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yuki ISHIDA
2. 発表標題 L'inquietude, la morale et le bonheur dans Les Nuits de Paris
3. 学会等名 Colloque international franco-japonais : Les revies de Retif de la Bretonne. Subjectivites, genealogies, morales (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石田 雄樹
2. 発表標題 幸福はどのように語られるのか レチフにおける一人称の語りの多層性
3. 学会等名 神戸大学国際文化学研究推進センター (Promis) 主催2021年度オンラインセミナー第1回新任教員セミナー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuki ISHIDA
2. 発表標題 Un narrateur moralisateur : le mal, la vertu et le bonheur dans Les Nuits de Paris
3. 学会等名 Les Nuits de Paris in extenso
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yuki ISHIDA
2. 発表標題 La quête du bonheur et la lecture dans les Juvenales et Les Nuits de Paris
3. 学会等名 Colloque international organisé par la Société Retif de la Bretagne. De la satire à la juvénale : formes et enjeux de l'indignation chez Retif de La Bretonne (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石田雄樹
2. 発表標題 レチフ・ド・ラ・ブルトンヌにおける自己同一性の探究：『パリの夜』を中心に
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2020年度秋季大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 永井 敦子、畠山 達、黒岩 卓	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 258
3. 書名 フランス文学の楽しみかた	

1. 著者名 阿部 宏	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 400
3. 書名 語りと主観性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

翻訳論文：「レチフ・ド・ラ・ブルトンヌとロマン主義作家 サンド、デュマ、ネルヴァル、シュー 」(フランソワーズ・ル・ボルニュ(クレルモン=オーヴェルニュ大学)の論文「La posterite romantique de Retif de La Bretonne」の翻訳：『言語・文学研究論集』(白百合女子大学言語・文学研究センター)、第24号、p. 63-77)

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関